12月新城市議会傍聴記 ㊤

地方政治クリエイト 伊藤 秀昭

高齢化、過疎化、国際化に真剣な議論

■新総合事業

新城市の産業論として、中山間地に位置する新城市を支える各産業の役割について質問した山崎祐一氏。特に「一貫して企業誘致策がとられてきたが、雇用や住宅供給は確保されてきたか。人口減少を踏まえて、今後、どう産業構造を時代に適合していく考えか」などと問題提起し、質の高い質問だった。

ただ市内の事業所を例に、市外からの通勤者が6割を超えていることから、職住近接を主張したが、逆に市外への通勤者も多いはず。

■中心市街地

白井倫啓氏は中心市街地の活性化の果たす役割や活性化のために乗り越えなければならない課題は何かなど質問した。

都市計画部長は「居住地としての魅力をどのように高めていくかが課題であり、その骨格としての栄町線及び駅前広場の整備が当面の課題」などと答弁したが、白井氏は滋賀県長浜市の成功例などから新城の歴史的資産を食いつぶすような中心市街地の活性化策について持論を展開し、観光による日本版DMOにも言及したが、内容が広がるばかりで、せっかくの議論がぼやけたまま終わったのは残念。

■健康寿命

少子高齢化が進み、2025年問題が迫る中で「健康寿命」を延ばしていくことが重要と主張した小野田直美氏。

当局は健康状態を維持するための個人に対する取り組みと健康状態が悪くなった時に地域で支えることができる地域づくりに対する取り組みが課題とし、未就学児、小中学生、成人、さらには高齢者の現状と課題について答弁した。

小野田氏は、社会保障のニーズは増大するがその財源が先細りになるという矛盾の中で、先手で市民の健康づくりに邁進（まいしん）すべきことを主張した。納得できる提案だった。

■臭気漏えい

新城南部企業団地でタナカ興業の臭気漏えいが絶えない中で行われた八名区長会説明会の内容から質問したのは山口洋一氏。

環境部長は「事業者は肥料登録を申請中であり、産廃の受け入れを制限し、2次発酵槽は半分ほど使用されている。事業者は2次発酵槽からの熱を逃がすために新たな脱臭装置の施工を検討している」など明かした。

まだまだ課題は多いこの問題。この工場の稼働が続く限り続くのだろうか。

■アライアンス大会

今年9月に世界新城アライアンス・カナダ会議で、20周年記念となる同会議が提唱市である新城市で行われることになったことから長田共永氏が取り上げた。

企画部長は18年の同会議は「まち・ひと・しごとのグローバル化」を図るための機会と位置付け、新城活性化につなげたいとした。開催テーマも新城市が提案し「世界大交流時代における世界新城アライアンス大会」となり、今後プロジェクトチームで検討するとした。

グローバル化が新城市に迫ってくる。

■過疎地域自立促進

菊池勝昭氏は「過疎地域自立促進計画」の進捗などについて聞いた。

企画部長は前々回の計画では05年の市町村合併により市域全体がみなし過疎とされ、前回の計画では鳳来地区及び作手地区が過疎地域に指定され、計画を策定することで過疎対策事業債の充当が可能となり、多様なインフラ整備を進めることができたとした。

計画の対象地域は多くの課題もあるが、事業の進捗に努力すると約束した。

■大河ドラマ

鈴木達雄氏は大河ドラマを生かした観光振興を取り上げた。

特に鈴木氏は「おんな城主 直虎」をきっかけとして奥浜名湖地域との連携や柿本武将隊などの新しい流れが始まったことから、一過性に終わらせず新城市の歴史観光資源に波及させるべきだと強調した。

産業振興部長は「若き時代の徳川家康に深い関わりのある浜松と新城地域を面的な広がりにつなげることができ、既存の歴史観光、武将観光に一層の厚みや深みをもたらす重要な要素であり、大きくアピールしていきたい」と意気込んだ。

直虎ブームから新城ブームへ継続できるかどうか。

■介護保険

村田康助氏は2年後の統合に向けて準備が進む介護保険料の一本化への対応や、介護サービスが低下することはないのかなど広域での対応の課題について質問した。

健康医療部長は「介護保険料は統合当初から基準額を統一することを基本に検討が進められている。地域支援事業は統合後も各市町村で実施する方向であり、地域密着サービスは市町村の枠組みがなくなり選択肢が広がる」などと答え、住み慣れた地域で安心して暮らしていけるよう努めていくとした。